俺とくねくね

神楽妖介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺とくねくね

【Ｎコード】
Ｎ０１８１Ｆ

【作者名】
神楽妖介

【あらすじ】
二流雑誌の記者である楠本健太は夏の特別企画で最近ネットで話題になっている妖怪“くねくね”が出るという心霊スポットの撮影に向かった。その夜、健太が撮影を始めると本物の“くねくね”が現れて―気が付けば成り行きで一緒に夕食をする事になってしまっていた。この夕食で健太は妖怪の知られざる一部を知る事になる。

前編

ある夜、とある田舎のラーメン屋に楠本健太は来ていた。
彼は知名度のあまり高くない二流雑誌の記者である。
彼は今回、夏の特別企画として最近話題になっている心霊スポットの取材の為にあまり観光客も来ない様な田舎へと足を運んでいた。
健太は空いていたテーブルを見つけ、そこの椅子に腰掛けた。
「ほら。座れ」
健太は入り口の近くで立ち止まっていた連れの男に声をかけた。
男はそれを聞くとそそくさと健太と同じテーブルに着いた。
「あの……どうもすいません」
男は健太にお辞儀をした。
男はまるで死体の様な白い肌をしており、髪は全て白髪で長い。目は少し蛇に似た感じの鋭さを持っているが、目の下にある濃い隈と弱弱しい雰囲気がそれを帳消しにしてしまい、更に身に付けている死装束の様な真っ白い着物が儚げな雰囲気に一層拍車を掛けている。
つまり、とても病弱そうな感じなのだ。
白い男は口を開いた。
「こういう所は初めてなので……」
「初めて？いつもは何食ってんだ？」
「はぁ…野生の生き物を捕まえて……一番よく食べるのは蛙ですね…」
それを聞いて健太は少し顔を引き攣らせた。
「へぇ……つーか、あんたも腹減るんだな」
「勿論ですよ。私だけじゃなくて、仲間達は基本的に全員、物を食べますよ」
白い男はしっかりと言った。
その後、ラーメン屋の店員が注文を聞きに来たので、健太はラー

メン二つと答えた。
「にしても…やっぱ信じらんないなぁ」
健太は白い男との話しを続ける。
「それでも事実ですよ。一応ですが…」
白い男は苦笑しながら言った。
「普通は信じられない事だって…今、ネット上で最も恐ろしい妖怪、見た者の精神を完全に崩壊させてしまう正体不明の怪物―くねくねが現在、俺の目の前にいて、これからラーメンを一杯食べようとしているなんて……ナンセンスにも程があるよ」
楠本健太は今、人生初の体験―妖怪と食事をしようとしているのだ。
―何故、こんな事になってしまったのか？
事の発端はわずか数時間ほど前に遡る―。
健太はネット上で本当にくねくねが出ると噂されているこの田舎までやって来て、その夜に出現ポイントと言われている畑の写真を撮っていた。
心霊スポットの写真を撮るなら、やっぱり背景は暗い方が迫力があるな。
健太はそんな事を考えながら、黙々とカメラのシャッターを押していた。
その時だった―。
突然、畑の向こう側に白い案山子の様な物が現れた。
「何だ？あんなのさっきは無かったぞ」
健太は疑問をぽつりと口にした。
その案山子は風も吹いていないというのに勝手にくねくねとまるで踊っているかの様に激しく動いていた。
しかも、それは徐々に健太の方へと近づいて来ていた。
健太は動揺した。
何だこれは？悪戯？いや、どう見てもあれは勝手に動いている。
仕掛けなんか無い。

まさか―本物のくねくね？
健太は恐怖のあまり動けなくなった。
くねくねの正体を見て、知った者は精神崩壊を起こし、二度と元に戻れなくなる。
健太はすぐにその場から逃げ出したかった。
しかし、健太はまだ金縛りにあったかの様に動けなかった。
くねくねはどんどん近づいて来る。
白い正体不明のその妖怪は健太のすぐ目の前まで近づいた。
その時―。
白い姿がまるで霧が晴れる様に拡散し、そこから別の姿が現れた。
その姿は白い着物に身を包んだ、病弱そうな白い男の姿だった。
健太は姿を見てしまった。
精神が崩壊する。
健太は自分の人生の終わりを悟り、絶望した。

あれ？
頭はしっかりしている。
身体も―どこも異常は起きていない。
目の前にはまだあのくねくねだった白い男がいた。
健太はどうすれば良いのか分からず、そのまま硬直してしまった。
「……あの……」
突然くねくねが口を開いた。
「え？」
突然の事に健太は戸惑った。
くねくねが続けて言った。
「その……ポケットの中の……物を…」
バタッ！
くねくねはそこまで言うと、いきなりその場に倒れてしまった。
「はっ？お、おいどうしたんだ？」

健太は混乱しながらも、慌ててくねくねの許へ駆け寄った。
声をかけて、肩を掴んで揺さぶってみたが反応は無かった。
そういえば今、俺のポケットの中に何入ってんだっけ？
くねくねの言葉を思い出した健太は、ズボンのポケットの中に手を入れた。
何かが入っていたので、健太はその何かを取り出した。
ポケットに入ってた物は―飴や一口チョコ等のお菓子だった。
そういえば、いつも出掛ける時は何かと便利だからお菓子を持ち歩いていた。
習慣の様になっていたから、あまり意識していなかったのでつい忘れてしまっていたのだ。
「……お菓子が欲しかったのか？」
健太が疑問を口にしたと同時に、くねくねから空腹を伝える物凄い腹の音が鳴った。
そして―。
その後、健太は放っておく訳にもいかなかったのでお菓子を全てくねくねに与えた。
くねくねはとても喜んで健太に礼を言い、お菓子を全部平らげたが、その直後にまだ全然足りない事を伝える二回目の腹の音が鳴り、放っておけなくなった健太は結局、くねくねに何かを奢る事にした。
そして現在、健太とくねくねはラーメン屋にいるである。
「こんな妙な怪奇体験、世界中探しても絶対に俺しか体験した事ないって」
健太はやはり苦笑しながら言った。
「……私も人間の方に助けてもらったのは、今日が初めてです」
くねくねは微かな笑みを浮かべて返した。
「へい、おまち」
店員が掛け声と同時に出来上がったラーメンを二人の前に置いた。
醤油味のスープの匂いを嗅いで、くねくねの顔が嬉しそうに綻んだ。

「……嬉しいか？」
「はいっ！！」
健太の問いにくねくねは満面の笑みではっきりと答えた。
その様子を見て、健太はなんだか嬉しい気持ちになった。
そして、健太は妖怪と一緒に夕食を食べるという、この上なく希少な体験をする事になった。

後編

「お前、本当に腹減ってたんだな」
くねくねが本当に美味しそうに出来立てのラーメンを思いっきり啜っている様子を見て、健太は言った。
「え？うっ……」
がっつき過ぎていたせいで、くねくねは咽てしまった。
苦しそうにケホケホと咳をする様子をみて、健太は心配なった。
「お、おい。大丈夫か？」
反対側に座っていた健太は席を立って、くねくねのすぐ隣へ駆け寄り、背中を擦ってやった。
「ケホッ……どうも、すみませんでした」
落ち着いたくねくねは申し訳なさそうに言った。
「まったく、ラーメン一杯にそこまで必死に食いつくもんなのか？」
そういえば、いつも蛙を捕まえて食べてるとか言ってたな。
「妖怪の食料事情とかってどうなってんの一体？」
健太は元の席に座り、気になってくねくねに尋ねた。
「はあ…大抵は私のように自給自足したり、万屋で買い物をしたりして暮らしています」
「万屋？妖怪って買い物するのか？」
健太の中にまた疑問が生まれた。
確かに昔話では狸や狐が木の葉を小判とかに化かして使ったとかいう話は聞いた事があったような気もするが。
それでも健太はやっぱり何か妙だと思った。
「……じゃあ、何で買い物しないんだ？そもそも妖怪の買い物ってどんなの何だ？」
「え？普通にお金と品物を交換してやりますけど？自給自足なのは…お金が無いので…」
「金って……妖怪って収入とかあんのか？」

聞けば聞くほど健太はよく分からなくなり、持っていた妖怪のイメージが根本的に大きく変貌していった。
「はい。八百万神の方々から伝説税というものを貰ったりして暮らしています」
「伝説税？」
またおかしな言葉が出て来た。
「ああ、人間の方はご存知無いですよね。伝説税は、この国にどれだけ伝説を創ったか、またどれだけ有名な妖怪になったかを基準に神様達から贈られるものなのです」
「つまり、有名になればなるだけ金が入るって事か？」
「その通りです。ですから、天狗さんや河童さんはずっと遊んで暮らしていける程の収入がありますが、私はまだ世に出て来て、まだ数年程度なのであまり……」
健太は神様が次から次へとやって来る妖怪達に給料袋を渡している所を想像して、あまりの滑稽さに笑いそうになった。
「へぇ……給料貰ったり、腹が減ったり、なんか人間とあんま変わんない気がするな」
「そうですか？」
そう言って、くねくねは少し頭を掻いた。
「それにしても、神様ってのも意外とケチ臭いんだな。自給自足しても空腹で倒れちまう様な雀の涙みたいな給料しか払わないなんてさ」
「それも仕方が無いんですよ。最近はどうも不景気で……」
おいおい、今度は妖怪の景気の話かよ、と健太は少し固めのチャーシューを噛みながら心の中で突っ込んだ。
「それに……ついつい先輩達に渡してしまう、私にも非がありますし……」
「先輩？お前、金無いのに他の奴にやってんのか？貸してるんじゃなくて？」
健太の問いにくねくねは気まずそうな顔をした。

「はぁ……頼まれると断れないもので……つい……」
くねくねは小さな声でそう言った。
「普通は金を貸す事はあるけど、ただ渡すって奴はそんなにいねぇぞ。なんか恩があるとかそういうのか？」
健太の問いにくねくねは答えず、ただ顔を伏せて、黙ってラーメンのスープを丼から直接飲んでいた。
「……お前って絶対、何かと損をするタイプだな」
少し呆れた感じで健太は言った。
「いいか。お前はその先輩達に金ヅルとして、うまく利用されているだけだ！そういう連中はな、都合の良い時だけ助けを求めといて、他人の事は絶対助けたりしない奴等だ！だから、さっさと縁を切っとけ！」
健太はしっかりとくねくねに言い聞かせた。
「し、しかし……先輩達は悪い妖怪じゃありませんよ……会ってみれば、きっと……」
どこまで、こいつは甘いんだ。
健太はそう思いながら、説教を続けた。
「お前が腹減らしてへろへろになったってのに、その先輩は助けてくれたか？助けてくれなかったから俺とラーメン食ってんだろ？」
くねくねはうう、と情けなく唸ると縮こまってしまった。
それを見て、健太は少し気まずくなった。
なんか、自分がこいつを苛めているみたいだ。
周囲は健太達の事などまったく興味無い感じの中年が四人と、厨房でテレビの野球中継に夢中になっている店主と皿洗いに夢中の店員だけなので、人目などまったく気にする必要は無い。
しかし、それとは別に健太は気まずかった。
くねくねはしょぼんと縮こまったままだ。
健太がコホン、と咳を一つした。
「そ、そんなマジにへこむなよ。つまり俺が言いたい事は……アレだ。親切もいいが、自分の事をちゃんと考えて、大事にしろって事

だ……」
気まずい空気を何とかする為にその場凌ぎで言った様なものなので、どうも歯切れが悪い。
説教なんかして、まるで小うるさい親父のようだ。
「……そうですね」
くねくねは小さめの声でそう言って、顔を上げた。
「これからは気を付けて、心配をかけない様にします」
くねくねの青白い顔には微笑みが浮かんでいた。
それを見て健太は、ちょっと言いたい事と違うんだよなぁ、と思いながら黙って頭を少し掻いた。
「迷惑を掛けてしまって本当にすみませんでした。でも、貴方のような優しい方に出会えて本当に良かったです」
「……よせよ。たかがラーメン位で……」
健太は照れながらそう言った。
ラーメン奢って、少し親父臭い感じで説教しただけなのに……。
「本当にいらない事、しない様にしろよ。ここに住んでる訳じゃねぇから、次にぶっ倒れても助けられねぇぞ」
そう言って、健太も微笑んだ。
その後、健太はラーメンの代金を払い、二人揃って店を出た。
くねくねは深々と頭を下げて、礼を言い、夜闇の中へと消えていった。
健太は宿へと戻り、不思議な夕食は幕を降ろした。

その後

あの不思議な出会いから、一ヶ月程の時が経った。
健太は、あの事を雑誌には載せなかった。
心霊スポット紹介の欄にはまったく似合わなかったし、第一信じて貰える訳が無い。
怪談と言うよりも、笑い話みたいだったあの事を記事にしたら、編集長に怒鳴られるどころじゃ済まされないだろう。
本当に信じられない出来事だった。
健太はしみじみとそう思った。
あまりにも奇妙で滑稽な事だったから、健太も最近では夢だったのでは、と思う様になっていた。
そんなある日の事、仕事をある程度終え、休暇に入った健太は実家に帰ってきていた。
特に予定も無かったし、恋人もいない健太にとって休暇の時に実家へ帰る事はある種の恒例のようになっていた。
とは言え、墓参り等はもう終えてしまっていたので、これと言ってやる事も無く、健太は両親に近況を簡単に報告して、あとは雑談をしながらダラダラと過ごしていた。
そんな感じで健太は母親の作った夕食を食べ終え、居間の隣の部屋に敷いてある自分の布団の上に寝転んだ。
すると、何かが枕の下敷きになっていた事に気が付いた。
健太は気になり、枕を捲ってみた。
「何だこれ？」
枕の下には紙切れが数枚と小さな巾着が一つあった。
健太は紙切れに、何か文字が書いてある事に気が付いた。
それは手紙だった。
筆で書かれた細い字でこう書いてあった。
“お久しぶりです。今から一月程前、飢えで苦しんでいた私を助け

てくださった事を憶えていますか？あの時は本当に有り難うございました。貴方は初対面どころか人間ですらない私に優しく接して、そして心配までしてくれました。私の心は今も貴方への感謝の気持ちで一杯です。せめてものお礼にこの秘薬と製造法を貴方に差し上げます。縁があったら、また何処かで貴方に出会えますように”

健太は手紙を読み終えた。

丁寧に自分の気持ちをそのままぶつけた様な内容の不思議な手紙。

手紙には宛名も差出人の名前も書いてなかったが、健太はすぐに誰が送ったのかが分かった。

「やっぱ大袈裟だなアイツは。そういや名前、教えてなかったな」

健太はそう呟いた。

「そういえば、この薬って一体何の薬なんだ？」

健太は疑問に思い、手紙を読み返したり、手紙に付いてきた製造法が書かれた紙に目を通したりしたが、結局さっぱり分からなかった。

巾着の中の薬を見ても、見た目は黒っぽい丸薬だという事以外は全然分からなかった。

健太は、うーん、と唸りながら少し乱暴に頭を掻いた。

その時、ハッとある事を思い出し、そして思い付いた。

今は引退して隠居生活を送っているが、自分の父親は元は薬剤師だった。

だったらこれを見せれば、何の薬なのか分かるかもしれない。

「馬鹿だなぁ。すぐに思い付けっつの！」

健太は小声で自分に言うと、巾着と製造法の書かれた紙を持って、すぐ隣の居間で座布団を敷いて座っている父親に尋ねに行った。

そして、それからまた数ヵ月後、健太と両親は世界初の飲むだけで癌細胞を通常の細胞に戻す特効薬の開発者として、世界的に有名になり、一生困らない程の財を成したという。

妖怪から秘薬や長寿の秘訣等の素晴らしいものを教わる。

これは昔から日本に伝わる物語によくある話しである。

夢の様な不思議な出来事はどんな時代にもある事なのである。
すっかり裕福になっても健太は、今の仕事を気に入っている、と編集記者を辞めなかった。
それから冬になって、また休暇に入り、世間も自分の身の回りも少し落ち着いた頃、健太は再びあの田舎へ向かった。
そして、くねくねと再会を果たし、あの時の様にラーメンを食べたとか食べなかったとか。
今も新しい妖怪や都市伝説が生まれる様に―。
おとぎ話は今もこれからも続く―。

その後（後書き）

妖怪のでる小説を書きたいという思いで書いた小説です。
全体的に短い小説なのに、製作日数がかなり掛かってしまい、本当にすみませんでした。
これからも力を付けて頑張っていこうと思っていますので、よろしくお願いします。
読んでくれた方々に、本当に感謝致します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0181f/

俺とくねくね

2010年10月8日15時29分発行